部活動改革、その先へ

# 地域で育むジュニアスポーツ

〈連載〉第26回

今年度から新たに「改革実行期間」がスタートし、中学校部活動の地域展開などの取り組みが新たなフェーズ（局面）を迎えた。今号では、「総合型地域スポーツクラブ登録・認証制度」における「令和7（2025）年度『部活動の地域展開タイプ』」に認証された「クラブ・ドラゴンズ」をはじめ地域クラブ体制の充実を図り改革を進める龍ケ崎市にフォーカス。

## 【茨城・龍ケ崎市発】「直営型」「既存団体運営型」のハイブリッドで地域クラブ体制充実

### 見渡せば既存クラブあり 昨年10月から休日は地域展開

茨城県南部に位置し、都心から最速で30分少々、商業施設も充実する龍ケ崎市は、人口約7万5000人、5つの中学校が点在するが、それでも少子化の波は徐々に押し寄せる。龍ケ崎市教育委員会文化・生涯学習課の海老澤大輔社会教育主事が説明する。

「2024年度から『龍ケ崎市地域クラブ活動移行推進協議会』を立ち上げ、地域展開に着手しましたが、当時すでに野球とサッカーは部員不足で、東西に分かれ合同チームを組むような状況にありました。

そこであらためて市の状況を眺めると、総合型地域スポーツクラブやスポーツ少年団があり、龍ケ崎市スポーツ協会でも部活動に指導者を派遣しており、さらにはスポーツ教育も充実する流通経済大学もある。そこで、実施主体となる『龍ケ崎市地域クラブ』を中心に据え、拠点校制で活動する『直営型』地域クラブと、総合型クラブ、スポ少、民間クラブなどで活動する『既存団体運営型』地域クラブ活動のハイブリッド体制を構築しました」



教育長から「歴史を変えるミッションにトライしよう」と背中を押してもらったと語る海老澤大輔氏

昨年度から地域展開を始め、まず既存団体に当たり、全10種目中5種目の展開が決定。野球、サッカー、陸上競技はクラブ・ドラゴンズで平日も含め活動。剣道はスポ少、テニスは民間クラブへ展開し、ほかバスケットボール、バレーボール、卓球、柔道、弓道の5種目は直営型となり、教員の兼職兼業の協力も得ながらの活動が決定した。

「さまざまな課題をクリアしながら2年をかけて準備を進め、'25年10月からすべての運動部の休日日地域展開を実現することができました。そして、今は半年間を経て、持続可能性など次の局面の課題が見えてきた、そんな状況です」

### 中体連認可で動き始め 従来教室をリメイク発進

部活動改革を進め、'24年に54部あった運動部は、今夏の中学校体育大会終了後には全37部に集約される。とりわけ複数部活動を受け入れるクラブ・ドラゴンズにはこんな印象を持っていた。

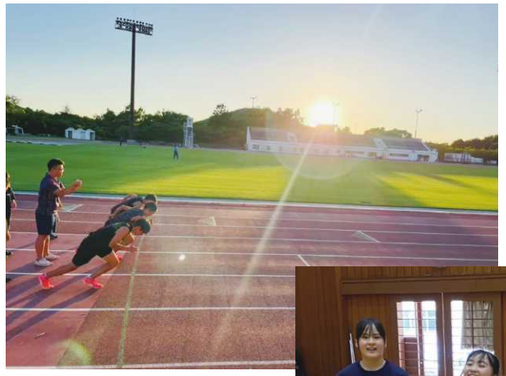
「流通経済大学と連携した総合型クラブとして長年の実績がある。また、すでに陸上競技では'23年度から中学校体育連盟登録し、陸上競技部がない学校の生徒は当時からクラブ・ドラゴンズに登録し大会出場していたことも聞いていました。ほかにも新体操やゴルフ、ニュースポーツなどさまざまな競技種目の活動をしていることを把握していたこともあり、野球とサッカーを安心して業務委託できました」

一方、受託側のクラブ・ドラゴンズの感触はどうだったのか。三渕和也クラブマネジャーが振り返る。

「'23年、クラブの中体連登録が認められたタイミングで、10年前からあった陸上競技の教室をリメイク。大きな変更をしたわけではなく、法人として〝こうした取り組みをやりましょう〟という一つの指標を出しました」

持続可能な形、受益者負担での活動、それを念頭にスタートする。

「そこで陸上競技と新体操教室の位置づけを見直し、さらに、県から高校ラグビーフットボールの展開の打診があり、その後この野球とサッカーの話をいただき、入札に声を上げました。行政とのやり取り、公平性の担保、人材確保……公共事業受託の手続きに苦戦することもありましたが、私たちとしては基本的に自走できる形を模索し、平日の活動も見越したり、ICTツールを活用したり、会員とのやり取りなど、人海戦術を要しない形を進めてきました」





『既存団体運営型』のクラブ・ドラゴンズで活動する陸上競技部と、『直営型』の龍ケ崎市地域クラブで汗を流すバスケットボール部。形は何であれ、そこにはユース年代の笑いやエネルギーが満ちている



三渕和也氏は、総合型クラブの認証クラブ立候補のメリットを強く訴える

### 認証クラブに認定され 視察希望の声、続々

そして、本誌85号でも既報の通り、部活動の地域展開タイプの認証クラブにも立候補した。

「わが子の経験からも子どもを預けるに信頼足るクラブか、また、県内で声を上げたのは私たちのクラブのみで地域展開の一歩、二歩先を行くという思い、さらには私たちがその基準にのっとっているかの確認の意味も含めての立候補でした」

立候補は大正解だった――三渕氏の率直な感想だ。

「メディア効果が大いにあり、SNSで検索すればクラブ・ドラゴンズの記事が上位に来る。今回の取材もそのご縁があればこそ。また、ほかの総合型クラブからも次々と連絡があり、実際に視察したいという声も届いています」

個人的にはこんな思いもある。

「総合型クラブを運営し、今、地域展開でもバックアップを期待されている。私自身、そしてウチのスタッフの多くがスポーツに育てていただいたという現実があるなか、今、この地域展開に着手せずして、この仕事を何のためにやっているのか」

部活動改革の話が最初に挙がったとき、海老澤氏は、周囲の抵抗感を大いに覚えた。それでもトップダウンではなく、幾度となく現場に足を運び、教育長のバックアップのもと校長会や教頭会でも2年間、何度でも話をし、徐々にマインド変化を感じている。

「県の担当者会議で各市町村の私のような立場の人間が集まると、人材はじめ〝○○が足りない〟と否定的な声が多くあります。しかし、よくよく調べてみると、人材バンク、JSPO主催のオンラインセミナーなどなど、カベを突破する方法はけっこうありました。それでも乗り越えられなければ横から回り込む方法があるかもしれない」

### もがけば道も開ける。クラブは活躍の格好の場

何より、現場に足を運んだほうが早い、海老澤氏はそうも言う。

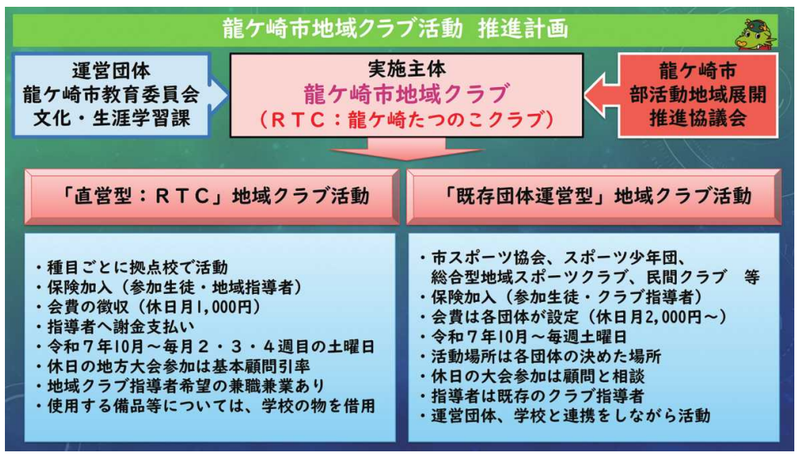
「私は女子バスケットボール地域クラブの指導をしておりますが、今、中学校に行く機会があると生徒から〝バスケのコーチ〟だけでなく、〝地域展開の人だよね〟なんて多くの生徒から声をかけられます（笑）。ある種目の地域指導者からは、〝子どもに関われて元気をもらえる。生きがいになっている〟そんな声も聞こえます。これも地域展開のねらいの一つでしょう。困ったときには、クラブ・ドラゴンズのように手を差し伸べてくれる団体や人材もいる。もがいてみることが大事だと思っています」

一方、三渕氏は総合型クラブにこんなエールを送る。

「行政の懐刀となることが大事だと思っています。自分たちの特色をアピールするより、行政が求めていることに視点を向け、それに対して自分のクラブは何ができるのか。

部活動改革は、われわれ総合型クラブにとって大いなるチャンス。どんなに頑張ってもほぼ費用がかからない学校部活動には到底太刀打ちできませんでしたが、今は行政が困って私たちに声をかけている。行政と互いに肩を組んで進んでいけば、いろいろな形が広がっていきます。

総合型クラブである以上、登録・認証制度に取り組むことは自然なステップであり、クラブの信頼性や運営基盤がさらに高まり、行政や地域、学校などとの連携もよりスムーズになる。総合型クラブの可能性を生かすためにも、前向きにトライしてほしいですね」




写真提供／龍ケ崎市教育委員会、クラブ・ドラゴンズ





2026 (c) Japan Sport Association